2020年1月1日発行（毎月1回1日）第47巻第1号／ ISSN0910-7991

機器、情報システム、設備 ― 明日の病院インフラを考える

月刊 新医療

2020 January
1
No.541

【総特集】
トップが語る―最新インフラ導入と個性化戦略

いかなる最新インフラを導入して、患者に、スタッフに、他施設に選ばれるようにするか。新年号の恒例企画「トップが語る」

【特集】
最先端の乳房検査装置の実力

【特集】
動画像ネットワークの先進機能が病院にもたらすもの

東海大学医学部付属病院は、2019年10月に新開発のテクノロジーを数多く搭載した最新式1.5テスラMRIを導入して、
検査の質とスループットの向上を実現している（詳しくはグラビア頁）。
同病院を背に立つ画像診断科の橋本 順教授（中央右）と丹羽 徹教授（右端）、放射線技術科の室 伊三男放射線技術科長（中央左）と渋川周平主任（左端）

DATA

動画像ネットワークシステム設置施設名簿［Part1］
放射線治療装置・システム設置施設名簿［Part2］
マンモグラフィ設置施設名簿［Part3］
マルチスライスCT設置施設名簿［Part4］
主要CT仕様一覧

エム・シー・ヘルスケア

20周年を迎えた「病院の経営を考える会」開催

エム・シー・ヘルスケアは、11月29日、品川インターシティホール＆会議室（東京・港区）にて、「第20回病院の経営を考える会」を開催した。今回は「医療と社会」をテーマに、講演会と鼎談からなるプログラムが組まれ、計６名の演者が登壇した。また、例年併催されるワークショップは、病院経営層（次世代経営層を含む）、病院事務部門、災害拠点病院を対象に開催された。

冒頭、同社代表取締役社長の木村真敏氏が挨拶及び今後の抱負を述べ、続いて講演会１が行われた。まず、大島伸一氏（国立長寿医療研究センター）が、「医療と社会の大転換」をテーマに講演。同氏は社会と医療の大転換の要因として、「日本における人口構造の変化やAIなどの技術の進歩」などを挙げ、今後求められる医療の転換のキーワードとして、「パターナリズムからパートナーシップへ」、「治す医療から治し支える医療へ」を掲げた。

また、同氏の講演には司会兼対談者として、辻　哲夫氏（東京大学高齢社会総合研究機構）が同席。同氏は「地域包括ケアと生活支援産業」をテーマにショート講演を行い、その後、大島氏との対談が行われた。

講演会２では、江崎禎英氏（経済産業省）が「『人生100年時代』の医療・介護～高齢化の進展と疾患の性質変化を踏まえて～」と題して講演。同氏は、高齢社会で取り組むべきは「高齢化対策」ではなく、「還暦以降、いかに楽しく、健康に生き、『幸せの形』を見つけるかの実現」と指摘。それを支援する医療・介護の在り方を、「病気にならない（予防・健康管理に取り組みやすい環境の整備）、重症化させない（生活管理＝患者の関与をベースとした医療サービスの確立）、切り離さない（社会的役割の継続）ようにすること」とした。

次に行われた鼎談は、神野正博氏（恵寿総合病院）をモデレーターに、織田正道氏（織田病院）、江角悠太氏（志摩市民病院）が参加。テーマは「医療と社会をデザインする」。まず神野氏が同テーマに沿い講演。

同氏はまず“恵寿式”地域包括ヘルスケアサービスへの取り組みの概要を説明。その経験などから、これからの病院経営のキーワードを「病院の品質の時代から、地域の品質の時代へ」と表現し、必要要件を「病院医療の守備範囲の再構築」「医師と患者との関係の再構築」「最新技術導入と民間企業との協業の促進」とした。

織田氏は、「ICTを活用し『治し支える医療』への転換を本格化」を演題に講演。85歳以上の人口の急増に伴い、各地において地域医療が大きく変わる将来への備えとして、現在、同院が取り組んでいる退院直後のケアの継続を図る仕組みづくり、およびIoT・AIを活用した在宅患者を支える仕組みづくりを紹介した。

江角氏は、「病院が地方創生をする意義」を演題に、一時は病棟閉鎖等に陥った志摩市民病院再生の際の地域との関わりの経験から、地方における病院・社会の今後の在り方について見解を述べた。同氏は、「住み慣れた街で、住み慣れた家で、生きがいを持って最後まで暮らせるようにすること」が地方の病院に求められる使命とし、それを支える人材としての学生教育をはじめ、同院の現在の活動について具体的に示した。

その後、3氏および来場者も参加してのディスカッションが行われた。

大島氏

辻氏

江崎氏

神野氏

織田氏

江角氏

大島伸一氏（左）の講演の後に辻 哲夫氏との対談が行われた

鼎談によるディスカッションでは、会場からの質問にも回答した